

## 敦煌ハイライト、一泊二日

敦煌の街の歴史は漢の武帝が河西節度使を置いた頃（紀元一世紀）から始まり、シルクロードの要衝として栄えた。当時、敦煌は「沙州」と呼ばれ、ここから西が「西域」と名付けられた。つまり漠民族支配の及ぶ西端であり、ここを第一線として西域の異民族と対峙する軍事的要衝でもあった。また東西交易の拠点としてだけではなく、仏教伝来の中継点でもあり、とりわけでも鳴沙山千仏洞の存在は仏都としての敦煌の歴史を物語っている。千仏洞が本格的に拡張され、建股されるのは唐の時代。

西域異民族と接する軍事的要衝としての地理的な性格上、敦煌はたびたび異民族の勢力におびやかされ、支配され、あるいは周囲を異民族に包囲された陸の孤島と化した。異民族としては例えばチベット族吐蕃、回鶻（ウイグル）、そして井上靖が歴史小説「敦煌」で描いた同じくチベット族の西夏など。

「敦煌」によると、敦煌が西夏によって滅ぼされたのは一〇三七年。その崩壊のさなかに主人公、趙行徳によって万巻の仏典が密かに運び出され、鳴沙山千仏洞の洞窟に塗り込められた。以来、千仏洞は万巻の仏典とともに元明清の時代を歴史と流沙の堆積に忘れられることになる。二〇世紀に至り、一道士の手によって発見された仏典は、英のスタイン、仏のペリオ、日本の大谷探検隊の手に渡り、たちまち世界的な驚異となった。

※

午後七時、夕暮れが近づいてきた敦煌の街はずれを僕は走っていた。西域賓館近くの食堂でレンタサイクル（一時間二元）を借りただ。

西域賓館のあるT字路を南へ。西域賓館そのものが敦煌南部にあるために、しばらく走ればすぐに街はずれだ。田舎の一本道がどこまでも続き、道の両側には一昔前の日本の公営住宅のような平屋の民家が並んでいる。並木の向こうには鳴沙山がのぞき見える。果たして道が分かるだろうか、少し心配だったけれどもどう考えても間違えようのない一本道。ひたすら自転車をこいでいく。

スカシははるか前方、ヒゲは少し遅れて走っていく。僕はといえば、ペダルをこいでもこいでも自転車は進まない。もちろんどれも変速ギア

などは付いていない実用的な自転車なのだけれども、僕のあたってた自転車は少し小さくまたギア比が小さいようなのだ。彼らについていくことはとっくの昔にあきらめた。道のかたわらに自転車をとめて、白壁煉瓦造りの民家をカメラでパチリ。再び自転車をこいでいく。

しばらく走っていくと民家はとだえ、道の両側には視界もひらけて広々とした村の風景が広がる。青々とその穂先をとがらせた麦畑だ。前方には鳴沙山が黄土色の山肌を見せて横たわっている。高くそびえているという感じではなくて、横たわっているといった印象だ。だが平坦な敦煌近辺の地形にあつては、一步市街地を離れると鳴沙山の姿はどこからでも視界に入ってくる。

西域賓館から三〇分ほどで鳴沙山の麓に到着。自転車置場に自転車を預けて、入場券売場へ。外国人料金は一三元(FEC)で中国人よりもずいぶんと高い。迷わず人民幣を差し出して中国人料金で入場しようとするのだったけれど外国人慣れしている場所柄か、すぐに日本人だとバレってしまった。金銭感覚の鋭いヒゲとスカシは、こんな広いところだからどこか忍びこむ場所があるはずだ、とタダで忍びこむことも検討していたけれども、それも定かではないし結局は外国人料金を払って入場することにした。

公園の中は少し荒れた砂浜という感じで歩きづらい。すぐ前方には鳴沙山が横たわり砂漠の砂山特有の滑らかな稜線のカーブを見せていた。傾いた日差しを受けて、稜線の滑らかなカーブがくつきりと山肌に影をつくっていた。鳴沙山に向かって歩いていると、観光用のラクダをつれた男が声をかけてくる。ラクダは山に登るわけではなく、そこらを歩きまわるだけなので無視し、決して多くはない観光客とともに砂浜のような公園を歩いていった。

やがて鳴沙山の麓に着いた、と思うまもなく、スカシは砂山の稜線に沿ってとつと登っていく。スカシに続いて、ヒゲ。そして彼らを追いかけるようにして、最後に僕。それはどうやら一番登りやすいルートらしくて、滑らかな鳴沙山の山肌にあつてそこだけが前に登った人々の足跡で乱れていた。一步一步稜線に沿って、そして足跡を踏むようにして登っていくのだけれども、踏みしめる足もとから砂は崩れて、とても歩きづらく、しんどいのだった。しばらく登っては休憩した。

風が吹くと、微かに稜線がかすむ。細かい砂が稜線からこぼれて舞っているのだ。そのようにして少しずつ、鳴沙山はその姿を変化させてきたのだろう、と僕は思う。敦煌が「沙州」と呼ばれた時代には、今この時とは違った稜線を描き、違った姿形だっただろう。しかしそれにもかかわらず「沙州」の時代から、あるいはもっと昔から、鳴沙山は同じ鳴

沙山なのだ。僕は少し不思議な気がした。こんなに簡単に崩れていく砂山なのだから、時間とともにすぐに平坦に戻ってしまうような気がしたし、それにもかかわらず人間社会の時代、天変を越えて、漢の時代から変わらず鳴沙山のままであるということが。

とりあえずの山頂（と言うのも、いざ登ってみると鳴沙山はうねりながら南にどこまでも続いていて果てがないようなのだ。ガイドブックによると、鳴沙山は東西約四キロ、南北約二キロの広大な砂の山だということだ）にようやくの思いでたどり着くと、パラグライダーをしている若者たちがいた。砂山の頂上から舞い降りて、一回二五元だと言う。経験もないし恐いので僕にはハナからやってみるつもりはなかったのだけれども、スカシは興味を持ったらしくて、値下げの交渉をしたりしていた。しかし一度降りると、また持つて上がるのが大変なのだ、という理由で値下げ交渉は成立せず。

それぞれの思いのままに、鳴沙山を歩き、休憩し、あるいは物思いにふけた。鳴沙山の上から敦煌の方を眺めると、オアシスの街としての敦煌が一望できる。その規模はかなり大きいけれども、こんもりとした緑におおわれた敦煌の街はそのまわりを広大な砂漠（と言うよりも荒地）に囲まれている。

鳴沙山の上はうねりながらどこまでも続く折り重なった砂の丘のようになっただけで、不用意に歩いていると人目につかない丘の陰から濃厚なラブシーンを繰り広げるカップルの姿などが不意に目に飛び込んでき、旅人の旅情をだいなしにするのだ。もちろん旅人の旅情などたいたことではなく、鳴沙山の上で催してしまった僕が砂の丘の陰で用を足したことを告白することにもやぶさかではない。

鳴沙山の麓に、砂の山と山とに囲まれた小さな泉が見えた。月牙泉と呼ばれる三日月型の泉で、このような砂山の間にはひっそりと水をたたえた姿はなにか神秘的な印象だ。この月牙泉の水は三〇〇〇年以上も涸れたことがないともいわれている。もともと月牙泉の付近には人工湖がつくられ、その脇は畑になっているし、月牙泉の脇にも三重の塔が建てられ、その横にも寺院らしき建物が建築中で、神秘を演出する作爲が鼻についたけれども。

やがて日没が来て、太陽は地平線付近の雲に隠れた。くつきりとした曲線を描き、光と影との対照をきわだたせていた稜線は、次第にあいまいに夕暮れに溶けていく。

日没を見届けたあともしばらくはぼんやりと夕暮れの景色を眺めていたのだけれども、ふと肌寒さを感じてあたりを見まわすと、さっきまで山上にぼつりぼつりといった人影はいつのまにかなくなり、微かに麓の方

から聞こえてくる観光客の声もどこか寂しく響くのだった。もしかしたら山陰に隠れて見えないだけなのかもしれないがヒゲとスカシの姿も見えない。落ち合う場所も時間も決めていたわけではないけれども、そろそろ頃合いかなと自らにふんぎりをつけて立ち上がった。

下りは足跡のない滑らかな急斜面を勢いがつき過ぎない程度に駆け下りた、ジグザグに進路を変えながら。麓まではほんの数分のこと。振り返るとどこまでも滑らかな砂の斜面に僕の足跡が点々とけば立っていた。美しい曲線を誇っている鳴沙山には申し訳ないことをしたような気もするけれども、足跡はすぐにも跡形もなく消えてしまうだろう、と僕は思う。

麓には一日のお勤めを終えた観光用のラクダがゆっくりと主に引かれていた。月牙泉の方に向かって歩いていくと、半分店仕舞の様子を見せるお土産屋や軽食のテント小屋。砂浜のような地面に輪になって座り込み、賑やかな笑い声を上げる若者たちのグループ。彼らの脇を通り抜け、少し足を延ばしてそのほとりに立った月牙泉はなんとすることもない池だった。まるでアリバイづくりのようにしばらくほとりにたたずんだあと、少し急ぎ足で公園の門へと向かった。というのもヒゲとスカシを待たせているのではないかという思いがあったからだ。

鳴沙山の麓を帰りの観光客に混じって歩きつつふと鳴沙山の上を見ると、ぽつり人影が見えた。すでに薄暗くなった山上に取り残されたように座り込んでいた彼は、ふと思いを決めたかのように立ち上がると、鳴沙山の急斜面を稲妻のように斜めに駆け下りていくのだった。ヒゲだ。僕はふと、彼が風呂敷のマントをひるがえしていたら月牙泉なんかよりもずっと神秘的になれたのに、と思う。鳴沙山の姿から「月の砂漠」を思い、また月牙泉の「月」とつながって月光仮面を連想したのかもしれない。

公園の門を出ると、スカシが待っていた。自転車置場から各自の自転車を受け出して、敦煌の街へと戻る。行きと同じく、僕ひとりたっぷりと遅れたことは言うまでもない。

食堂に自転車を返却し、ついでに夕食。西域賓館に戻ったのは午後一時過ぎだった。時間切れで、またシャワーはお預けだ。

旅行鞆をしばらくごそごそとかき回したあと、スカシが取り出したのは「北京市街地図」だった。彼はそれをベッドに広げて、いくつかの安宿の場所を示しながら説明する。

ふんふんと相槌を打ち、説明の終わったあと彼が差し出した地図を受け取りながら、僕は少し意外な気がしていた。というのも、僕には彼が

人にあまり関心を表わさない、人との関係というものをいつもスカしていくタイプのように思われたからだ。実際に二日も一緒にいて、ほとんど彼とは会話らしい会話をしていなかった。もつともその点では僕とても同様で、少しは社交性のあるヒゲのおかげで短いながらも旅の同宿を樂しむことができていたのだろうと思う。しかし僕は別にスカシのことを悪く感じていたのではない。たまたま三人になったから三人部屋に入っただけ、というスカシの態度には、ある種の心地良いドライさがあった、むしろ僕にはありがたかった。同じ日本人だからという事実だけであたかもすでに何かを共有しているかのような態度を見せられるよりも。

ところで、僕は旅の情報収集をしているのだ。これから再び中国中心部の大都市の方へと戻っていくにあたって、とりわけホテルの確保のことが心配だった。とくに北京。中国の首都ということもあって、イメージとして安ホテルがあるのかどうか心配だったし、ガイドブックには情報が紹介してあるのだけれども、逆に情報がありすぎてどれにあたれば確実なのか途方に暮れてしまったのだ。

北京のホテル情報を仕入れたあと、ヒゲは取っておきの情報を教えてくれた。それは名付けて『西安の透明人間』というものだ。演じられるのは西安郵便局前の地下劇場。内容はと言えば、音楽に合わせて踊り子さんが踊りながら一枚一枚衣服を脱いでいくというもの。ただのストーリーップではないか、と言うなかれ。なんと彼女は最後にはガイコツにまでなってしまうのだ。ヒゲの話によれば、たぶんマジックミラーをうまく使っているのだろうということだったけれども、僕はまだ見ぬ『西安の透明人間』に想像力をかきたてられ、これからの困難な旅をやりぬく目的でもいったものを与えられたような気がしたのだった。

※

六月一二日（土）。午前八時発の莫高窟行きのバスに乗るためにホテルを出て、汽車站へと向かう。

途中、露店のパン屋さんで朝食のパンも買い込んで、汽車站前の歩道で、さてバスはどれかな、と捜していると、目の前を大型バスが走り去っていった。時刻は八時数分前。まさか、と思いながら汽車站のあたりを捜してみたが、それらしいバスはなく、置き去りにされたことによく思い当たった僕らはがくぜんとその場に立ちつくすのだった。

もしも僕ひとりだったら、そのままあきらめてしまっただろうけれども、これからの旅の予定が長いヒゲとスカシはあわてて售票処に駆け込

み、窓口へと向かう。窓口の女性服務員に向かってほとんど日本語だけで、バスが八時前に発車したことで、乗車券の払戻しの要求を伝えるのだった。窓口に突き出した腕時計を何度も指差しながら。幸いにもまだ八時前だったこともあり、服務員もバスが定刻よりも早く出発したことを認め、乗車券の払戻しをしてくれた。これまで服務員といえば横柄な態度しか知らなかったし、それから考えてもとても払戻しなど受付入れられないだろうと思っていた僕は、なんでも言ってみるものだなと、妙に感心したのだった。

もつとも払戻しができたからといって、喜んでばかりはいられない。代わりの莫高窟行き足を捜さなければならぬ。公共バスは日に一便だけなので、ミニバスか簡易タクシー（軽トラック様のものやオートバイリキシャ）しかないのだけれども、汽車站付近にたむろするこれらは、往復五元のバスに比べるとかなり高い。結局西域賓館前まで戻って、たまたま居合わせたミニバス（片道五元）に乗り込んだのだった。最初の一目からのアクシデントでどうなることかと思われたのだけれども、まずはひと安心。

ミニバスは敦煌市街地をすぐに抜けて、石混じりの荒地という感じの砂漠を走っていく。微かに流れの痕跡をとどめた水のない河。どこまでも平坦な白っぽい荒地。市街をかなり離れた頃に、ふと平坦な荒地の中に不思議なものを発見した。それは直径一メートルくらいの砂の盛り上がりで、注意して見ていると同じような盛り上がりが続々と続いている。最初はまったく何なのか分からなかったのだけれども、比較的新しそうな盛り砂はきれいな円錐形をしていて、その前には石の標識のようなものが立ててあり、すぐに墓なのだと思いついた。荒漠とした砂漠のただ中の、墓。それは砂漠を渡る風に吹きさらされている死者たちの姿を僕には幻想させ、何かあぜんとした感慨をもたらした。

前の座席では、ヒゲが香港人らしい観光客と片言の英語で話していた。僕もふと口をさしはさもうかと思うのだけれども、捨て置かれたような砂漠の墓地に後ろ髪を引かれる思いで、沈黙していた。

やがてミニバスは莫高窟に到着。敦煌からは約三〇分。辺境とはいえない有名な敦煌莫高窟のこと、きらびやかな観光地を想像していたのだけれども、ターミナルには数件の食堂とお土産物屋だけ。ただ付近には木立が生い茂り、荒掠とした砂漠を眺めつづけていた目にはなにかほっとする景観だった。参観券は外国人は四〇元（FEC）なのだけれども、ミニバスで知りあった香港人が親切にも代わりに人民幣で買ってくれた。手電（懐中電灯）を借りるのに二元（保証金一〇元）、手荷物預かりに一元。

流れの痕跡だけをどめる水のない河を渡り、中国風の参道門を通り抜け、所々にお土産物屋や茶店のある参道を歩いていく。窟への入口でしばらく待っていると、莫高窟専属のガイドがチケットを確認し、二人ほど集まったところでグループを先導していく。

莫高窟は鳴沙山東の断崖に開けられている。創建は前秦の三六六年といわれる。最盛期の唐代には一千以上の窟があったが、長い歴史の中で、自然の崩れと人為的な破壊によって、現存する洞窟は四九二個。その内一般旅行者が参観できるのは約三〇窟だけだ。洞窟はだいたいにおいて地上の高さ、二階、三階の高さ、と三層になっていて、回廊がめぐらせてある。

ガイドは中国語の説明をしながらグループを先導し、参観順路の洞窟に着くとおもむろに鍵を開ける。ひんやりとした洞窟の内部は大小それぞれだけれどもだいたいにおいて縦横高さともに五メートルくらい。中央にはメインの仏像が安置され、それを囲う壁面には様々な画が描かれている。仏画、物語や風俗を表す画、それに敦煌のシンボルともなっている飛天の画など。ガイドは懐中電灯の光で差し示しながらそれぞれの仏像や画などの脱明をするのだけれども、中国語が分からない僕らは借りた懐中電灯の光を頼りに適当に窟内を見てまわるのだった。

ひととおり見学を終えると、全員洞窟を退出し、ガイドは扉を閉めて鍵をかける。そろそろとガイドに従って次の洞窟へ。

グループの中にフランス人のおそらくは留学生らしい女性がいて、熱心にガイドに質問していた。何の根拠もないことだけれども、金髪のフランス娘が器用に中国語をあやつることに、僕は違和感のような奇妙な感じを抱いていた。仏像にしても中国語にしても、文化的にも民族的にも近いはずの僕らの方が、逆にちんぷんかんぷんで疎外されているような感じなのだ。自らの不勉強がうしろめたいような奇妙な感覚だった。

午前中に一〇窟ほどを見学し、午前一一時頃に午前の見学は終了。午後は二時半から、というガイドの言葉に従ってそろそろと解散。振り返ると莫高窟の中心ともいえるべき九層楼の雄大な建築が背後に鳴沙山を従えてそびえていた。

散歩がてら三人であたりをぶらつきながら、適当な食堂を捜した。飾り物や絵葉書、書籍、写真集などのお土産物屋を冷やかしながら歩いていくと、いつのまにか水のない河のところまで戻ってしまった。停車場のところにはポロポロのテント小屋の食堂があったので入っていった。貼り出されたメニューを見て、炒面片(三元)を注文。焼きそばだと思っていたのだけれども、さにあらず。面のもとになる塊を手でちぎっては湯の中に放り込んで茹で、それを野菜とともに炒めるのだ。客は僕らの

他には若い女の子たちのグループだけ。なにかひっそりとした印象だった。

水のない河の橋上から遠くを見渡すと、起伏のある黄土色の大地が広がっていた。風が吹くと、舞い上がった砂で遠景はかすむ。河のほとりあたりには木立もあるのだけれども、微かに砂の衣をまとったように煤けたような印象だ。河に沿ってのびる鳴沙山の山腹には所々洞窟が口を開けているのが見える。回廊もなにもなくただ山腹にぽっかりと洞窟があるだけだ。僕はふと、かの超行徳が万巻の仏典を運び込みその壁に塗り込めたのは、そのように人知れず忘れられたような洞窟だったに違いない、と思う。

空は晴れ渡り、日向はとても暑い。午後の参観時間までにかなりの時間があったので、僕はそれぞれの思いのままにあたりをぶらついたり適当な場所で昼寝をしたりした。

僕は適当にあたりを散策したあとお土産物屋で莫高窟を紹介した小写真集を買った。さしたる知識もないままにこのまま漠然と見学をしてそれで終わりというのではあまりにもつたいないと思ったからだ。木立に囲まれた茶店のテーブルに腰を下ろして、ジュースを飲みながら写真集を眺めた。あたりには人気も少なくて、まるで時が止まってしまったかのような穏やかな時間。茶店の一角にセットされたオーディオからは香港歌謡が流れていた。

たつぷりと昼の休憩をとったあと、午後もまた約一〇窟を見学した。僕らのチケットを代わりに買ってくれた香港人のグループはいなかった。あまりに休憩時間が長かったし、どれもこれもそんなに変わりばえのない洞窟の見学は午前中の分だけで十分と思ったのかもしれない。

長い時間をかけて莫高窟の見学を終えて、僕の感想はというと、正直なところまあこんなものかな、というものだった。もともと当時の中国からいうと地の果てともいえるべき敦煌、シルクロードとはいっても広漠とした砂漠のただ中にぽつんとあるようなオアシス、敦煌のそのまた外れの莫高窟だ。交通機関といえば馬やラクダくらい。そのような場所に千数百年も前に窟の建設が行なわれ、しかも人間社会の天変と自然の風化とに耐えて今に伝えられているということ、これらのことはそれ自体として驚くべきことだ。しかし、実際にそこに足を踏み入れ、観光客とともにがやがやとどれも同じようにも見える洞窟をまわっていると、そのような驚きを保つことは難しく、何の変哲もない観光地をまわっているような気分になってしまうのだ。

しかしながら洞窟内部の仏像や様々な面はとても興味深かった。ガイドの説明が中国語だったので、それぞれの窟がどの時代に建設されたも



のなのかが分からなかったのは残念だったけれども。仏像や画の登場人物の姿形を見ると、あきらかに東アジアとは異なる西域、中央アジアの姿形をしていたり、またあきらかにチベット仏教の影響を受けているように思われる仏画もあり、敦煌が仏教伝来の中継地であることを思わせる。しかしまた一方で西から東へという伝来の軌跡だけではなくて、いったん東へと通り抜けた仏教が中国において咀嚼され中国風に解釈されて再び敦煌へと伝達された軌跡もまたうかがえる。そのような仏像や画は日本人としての僕たちにも親しみやすく、また逆にいえばおもしろみは少ない。

僕たちにとって静的な儀礼や超然とした仏像の表情に象徴されるような仏教観がくつがえされるのは、初期の仏像や画、とくに飛天の図などに見られる躍動感、流動性、流れの感覚だ。そして僕は直観的にこのように思うのだ。その「流れ」の感覚こそが仏教というものを普通宗教たらしめた原動力ではないのかと。そして中国に伝来した仏教はその「流れ」の感覚を中華世界的な同心円的な精神の形によって回収しようとした。莫高窟で時代の経過とともに攻めぎあっているのは、このような「流れ」の感覚と同心円的な精神性なのではないか。さらに想像を伸ばせば、日本に伝来した仏教というものは中華世界的な同心円から中華世界という具象を取り除いた同心円性ではないか。それは同心円性という抽象であるとともにまたそこに日本という具象をあてはめるということでもある。だがそこにおいて欠落しているのは「流れ」だ。（僕がここで「流れ」という言葉で表わそうとしているのは、例えば横断ということだ。それは異質なものと出会い、異質性の発現、相互に混ざりあいつつも併存する異質性、それによる精神の流動、生命力の躍動とでもいったことだ。それに対して「行く川の流れは絶えずして：」という口本的な流れの感覚は均質な空間性を土台にした諦観であり、むしろ同心円的だ。）ただ単に仏教文化の洗練ということとは異なる「流れ」と同心円性という二つの異なる原理の攻めぎあいと、同心円性による「流れ」の回収という事態がある時代に起こったのではないか。とても直観的な話で何の確証もないのだけれども、それが莫高窟を見学した僕の印象だ。どうしても同じ平面での漸進的な洗練といった解釈では納得できないものを感じたのだ。

最後の洞窟を見学したあと、ガイドがグループの皆に向かって意向を尋ねる。

「もうすぐ四時で、公共バスは出てしまいますが、どうしますか？ このまま見学を続けますか、それともこれで終わりということにしますか？」

公共バスを乗り過ぐすと帰りの便が心配だったし、洞窟の見学はもう十分という気持ちもあり、異議なく解散ということになった。

荷物を受け出し、懐中電灯を返却して停車場へいつてみると、すでにバスは満員で、すし詰め車両に立ちっぱなしということになった。

バスは約三〇分で敦煌市街地に着き、そのまま汽车站まで向かうのだが、僕はヒゲとスカシを残して、何人かの降車客とともに市街地でバスを降りた。というのも、日本から持ってきたカミソリが急に切れなくなり、替え刃を買おうと思ったのだ。

昨日の散歩のときに見当をつけておいた商場へと入っていく。日本のスーパーマーケットくらいに広さなのだが、ほとんどの商品はガラスケースの中に陳列され、ケースの向こうには担当のスタッフがひかえている。

日用雑貨のガラスケースを覗いて捜していくと、すぐにジレットの替え刃が見つかった。二つがパッケージされたもので一〇元。輸入物なので中国製よりも少々高いけれども、かなり長持ちするのでそれにした。

スタッフに言っ、替え刃をガラスケースから出してもらおう。僕の持っているカミソリの柄と合うかどうか確かめたかったのだけれども、パッケージの上からは分からない。しかし同じジレットのカミソリなのだからたぶん大丈夫だろうと思っ、買った。

商場を出て歩道を歩きながら、パッケージを破っ、替え刃と柄の接続部分を確認する。ところが、運悪く接続の形式が僕の持っているものとは違っ。あわててさっきの商場へと戻った。僕のカミソリと合うものと交換してもらおうか、それがなければ柄も買うつもりだった

先程の売り台に戻っ、陳列された商品を捜すけれども、買った替え刃以外のものはないようだった。しかも柄の方も見当らない。スタッフの女性に声をかけ、身振りで、柄はないのか、と尋ねる。彼女の答えは

「没有」だった。パッケージを破ってしまったものを突き返すのも気が引けたので、

「僕はこのカミソリに合う柄が欲しい。柄はどこに売っていますか」と繰り返して粘っただけれども、ないものはないのだった。それならば替え刃を引き取っ欲しいということを中国語でどのように伝えたらいいのかわからないままに、

「柄はどこに売っていますか」

と繰り返していると、意味がほとんど聞き取れない言葉をまくしたてていた彼女も面倒くさくなっのか、替え刃を指差して、

「要、不要（いるのか、いらぬのか）？」

と言葉を投げつける。

「不要」

と答えると、破れたバッグを見てブツブツとなにかを言いながら、面倒くさそうに一〇元を投げ返した。

替え刃だけ売って柄がないとはなんと非常識かと僕は思い、接続部分が出たことを確認しないままに替え刃を買った自分の非常識を紛らせようとしたのだったけれども、破ってしまったパッケージの替え刃を引き取らせてなにか悪いことをしたような気もしたのだった。

ホテルの部屋に戻り、しばらく休憩して、久しぶりのシャワーを浴びる。それというのも、シャワーの時間は九時から一時までで、この二日間いつも遅れて「没有」だったからだ。

シャワーのあとは、ヒゲとスカシの二人連れと最後の晚餐。

食堂で晩飯を食べながら話を聞いてみると、莫高窟の悪口が続々と飛び出してくる。仏像はほとんどが粘土か木彫りで造ったもので、石像ほどの緊張感がない。あるいは壁画にしてもどうやら時代が下ってから塗り替えられたもののような感じだとか。

「それにしても」とヒゲは言うのだった、

「大同（タートン）の石窟はすごかった」と。

「そうそう、石窟はやはり大同だ」というようにスカシも相槌を打つ。僕は自分が見てもいけないものを引き合いに出されても答えようがなかったのだけれども、大同の石窟を是非とも見てみたいものだという思いにとらわれたのだった。

ホテルの部屋に戻り、ベッドに横になって大同の場所を調べた。北京からほど近い長城のすぐ南、内モンゴル自治区との境に位置する街だ。西安からは洛陽へと向かう予定だったのだけれども、西安―大同―北京に変更しようかと、僕は思う。彼らの話によると洛陽というのはそんなに面白い街でもなさそうだし、地理的にも歴史的にも西安とそんなに違うわけではないように思われた。それよりも少し足を延ばすことになるけれども、北の大同のほうが性格の少し違う街を見ることができるとはではないか。

漠然とそのように考え、僕は明日の出発に思いを馳せる。グルムド、敦煌と旅をともしたヒゲとスカシの二人連れと別れて、再びひとり旅をすることになるのだと思うと、妙に寂しく、またひとり旅の不安感とでもいうものが込み上げてくるのだった。